



記憶を記録に 私の切り抜き帳 I



孤児著作物についてのこと

石下郁子

いつか人々の記憶から忘れ去られてしまいそうな作品を

有名無名を問わず記録に残したい。

ごく身近な限られたものだけですが、

これまでに出会い、感動を与えてくれた作品を

記録に残していきたいと思います。

今までブログに書いてきた記事と、

これから書いていきたいと思うことを

すこしずつ加えていきたいと思います。

それには著作権法の高いハードル、

『孤児著作物』の問題があります。

「孤児著作物」について思うこと

はなはだ恐縮ですが、

幾日前、ここに登録、公開の小説、『レクイエム・影と光の中に』は、昨年自費出版し、電子書籍図書館、ブログ掲載などを経てこちらに移らせて頂いたものです。

ブログには小説のみ単独で載せ、ほかのブログとは関連性を持たせなかったのが、連載を終えて一定期間を経た後は、当初より別のところに移す予定でした。

その時期が来ていざ移動させようとしたとき、いろいろなサイトで著作権に対する注意警告が表示されているのを目にしました。

自分の作品がそれに抵触しているのではないかという不安を持ちました。それであれこれと調べていました。

何か、物を書く場合、著作権のことは忘れてはならない問題です。

なかでも一番心配したのは 「孤児著作物」といわれていて、書いた人の所在が分からない作品をその本の中に引用していたことでした。

それは幼少のころ読んで、記憶に残っているだけの詩でした。

どなたかこの詩を知っている方がいればいいな、と今も望みを持っているのですが、もう半世紀以上も心の中であたためてきた詩です。

ききょう かるかや おみなえし はぎ くず なでしこ ふじばかま
あきのななくさ さくみちを わたしはあるいていきました
すずむしさんのおうちには だれがおきやくにきたのでしょうか

結果、心配ではあったのですが、著作権法48条（出所の明示の2）、無名の著作物と思われることから、今回も引用を決めました。

同じ雑誌には見開きのページいっぱい赤い着物を着た女の子の顔が描かれた、こんな詩も載っていました。

おいばねこばねおじょうさん

おししのおよめに

おなりなさい

おおいやだ

おはなぺっちゃんこ

リズム感も良く、出だしがみな「お」で始まっています。

すこし横目づかいの表情まで記憶していますが、お獅子が書いてあったかは漠然としか覚えていません。

こういう詩をなんていうんでしょうか、いつかどこかで聞いたようでもありますが覚えていません。小学校の先生ならわかるのでしょうか。

雑誌は『ようねんえほん』という名前でしたが、該当するものが見つからず、まして詩

はだれが書いたのか見当もつきません。でももしかしたら名のある誰かが書いたのかも
しれません。

すぐれた作品だと思いますから。

このほかにも、忘れられないたくさんの詩や文章が記憶の中に残っていますが、安易に
ネットなどに転載するのはタブーだとか。

先日、奥日光を歩いたとき、林の奥からかっこの声が聞こえてきました。

金子光晴の『かっこ』の詩そのままの感じで、その詩をそらんじながら歩きました。



写真を撮ったので、詩を書き入れようと思い、調べたらまだ保護期間中でした。

このような有名な詩は残っていくと思いますが、その時代ごく限られた人しか目にし
ていないすぐれた作品もあります。

その人がいなくなったら、それは後世に伝え残されず、消えていってしまうような作品
もたくさんあります。

著作物の問題に明るい兆しがほしいところです。特に「孤児著作物」に光を、と思
います。

しばらく前、中学の同窓会があったとき、三十数名の集まりで広間で車座になって、そ
れぞれ一言づつ何かを話す機会がありました。

私は、3年の頃、国語で学んだと思う、教科書の話をしました。

二人の小さい男の子と女の子が仲良く野原を歩いていて、小さな小川にさしかかります。

二人はその小川を挟んで歩き始めます。最初は子供の足でも簡単に飛び越えられそうな川でした。

川幅が次第に広くなり、流れも激しくなってきたとき、またもとのように一緒に歩くのは難しくなった川の存在に気づきますが、歩き続けます。

やがて互いに行き来もできない大河が二人を隔てていきます。

「15歳の少年少女の旅立ちへのはなむけに書かれた話だと思い心に残っていました。それから長い年月が流れて、小さな川を挟んで歩いていた二人のように、あの頃、すぐ近くにいた友だちも離れ離れになって、皆それぞれの人生を歩んできましたね。でもこうして再び合うことができうれしかったです」

マイクを持ってそんなことを私は話したのでした。酒席でしたが聞いている人はいると思って。

ところがお開きになった後 「あの教科書の話、全然記憶にない」とみんなが言ったのでびっくりしました。

そのほかのものもほとんど何にも覚えていないって。ええっ、ほんとにそうなの？信じられない。

ショックでしたがそろいもそろってみんながそうだとすると～。記憶って、こんなふうに忘れていってしまうものなのかと思いました。ちなみに女の子の名前はみっちゃんでした。

『しぐれた林の奥で』に始まるあの『かっこう』の詩も、ばらばらになった友が、この霧のどこかにいるのだろうと、しみじみと人生をうたっています。

無名の著作物といえど同じく中3の時こんな詩を書きました。

『詩について』

「見たまま 感じたままを

そのまま人に話して聞かせるつもりで

考えながら、

読む人の心を打つもの」、

いつか国語の時間に〇〇先生が

すっきりした字で黒板に書いた言葉

『詩』について、

私は今も、それを忘れない

この詩だとはっきり著作権侵害に当たるのかな、と思ったりします。

〇〇先生からは中1の時国語を教わりました。

その1年半後、先生はそれまでなかった文芸クラブを開設して下さったのですが、そこに提出したこの詩を読まれても、著作権のことなどはもちろん何もおっしゃいませんでした。

市井では多くの作品が生まれまた消えていっている気がします。

孤児著作物にはこのままだと、もう一つ重大な危惧があります。

ある作品がある人の心に残っていたとします。書き手は誰かわからない。

何十年かが過ぎて、その時代の人々がみんな死んでしまった頃、長生きしたその人が、著

作権を主張する人がいないと見定めて『これは私が書いたんです。私の作品ですよ』と言
い残して亡くなったとしたら。

誰のかわからない作品がその人のものになってしまうことになります。

ですから「孤児著作物」の明らかな部分（少なくとも年代など）はできるだけ明瞭にし
て、不明の部分はそのままに伝え残していった方がいいと思います。

先日市立図書館で『ゲド戦記』と『若い詩人の肖像』を探しましたが、見つからないの
で検索すると、両方とも書庫に入っていました。

借り手がなくなった本は書庫で眠ることになり、結果、名作でさえも人の目に触れる機
会は失われていくのを感じました。

Web時代の到来は、こうした作品の物理的保存という意味では、一定の役割を果たし
てくれそうではありますが、反対にあまりにも快樂的な読み物やゲームが手じかにある
現代は、物を考え、地道な行動を続けていく人が少なくなっていくという気がします。

書物も深く人生を考えたりする物は退屈だと敬遠され、刺激的な読み物が好まれてい
ます。

ずっと後になって、そのつけを支払う日が来るかもしれないという危惧を感じます。

『ジャン・クリストフ』はロマン・ロランが、ひとりの音楽家の生涯を書いた長編小説
ですが、その初めの方にクリストフと祖父か、伯父とだかかわす会話がありました。

クリストフが作った作品についてを訊ねているのです。

「お前は、自分の作品を後世に残したいか、名前を残したいか」と。

これに対して「作品が」とクリストフは答えています。

正しくを知ろうとして分厚いその本を手にとってみたのですが、とても細かい字でど
こにあるのか探すのをやめてしまいました。昔はこんな本をすらすら読んでいたんだな、
と驚きもして。

新しい眼鏡を作って、もう一度その本を読みなおしてみようかと思った次第でしたが。

いろいろな積み荷を下ろしてここまで来ましたが、何かに感動していたかつての心だ
けは今もなくしていないような気がします。

その時々感動し心に残っているものは、その後の人生を豊かにしてくれていると感じ
ます。けれどすべての人がそうかというところではないらしい、ということが私には驚
きでもあったのですが。

気がついたら大切なものが残っていないということにはならないように、朽ちていき
そうな資料を後世に伝えていくにはどうしたら、小説を新たに公開するにあたり、そんな
ことを考えた数日間でした。

* 最近ブログに書いた記事 『おいばねこばねおじょうさんさん……』 を書き直し、
掲載させて頂きました。

「切り抜き帳」はブログのほうのカテゴリでもありますが、1回目の今回は、自己の
作品のプロモーションも兼ねさせて頂いてしまいました。

最後までお読み下さりましてありがとうございました。

記憶を記録に・私の切り抜き帳

<http://p.booklog.jp/book/75122>

著者：石下郁子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/thmo2535/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/75122>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/75122>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパバー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ